様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：７２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０１４７

研究課題名（和文）和物彫漆の基礎的研究―堆朱楊成・玉楮象谷・偕楽園塗を中心に

研究課題名（英文）Fundamental Study on Carving Lacquers Produced in Japan : Focusing on Tsuishu Yozei, Tamakaji Zokoku and Kairakuen nuri.

研究代表者
小林　祐子（Kobayashi, Yuko）

公益財団法人三井文庫・文化史研究室・主任学芸員

研究者番号：６０３９９３３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、これまで「唐物」（中国製）を中心に行われてきた彫漆研究を根本から見直し、長く研究の埒外に置かれてきた「和物」（日本製）彫漆の実態を解明しようとするものである。
とくに資料の充実している江戸時代の「和物」彫漆、すなわち江戸幕府御抱職人の堆朱楊成、高松松平家御抱職人の玉楮象谷、紀州徳川家の御庭塗＝偕楽園塗などの彫漆ついて調査を行い、漆調合などの材料、彫技などの技法や文様等の特徴を把握し、唐物との相違点を掴むことに努めた。これにより、唐物彫漆のなかに埋もれている和物彫漆を求索するための有用な手がかりが得られると考える。

研究成果の概要（英文）：This study is intended to elucidate the actual condition of carving lacquers produced in Japan which research has not been conducted until now.
During the period of this study, I researched the Japanese carving lacquers of the Edo period, focusing on Tsuishu Yozei, Tamakaji Zokoku and Kairakuen nuri. To understand the features, such as those of the techniques and patterns , and strove to grasp the differences between the Chinese carving lacquers.Through this research , it becomes possible to obtain useful clues, to look for the Japanese carving lacquers that buried in among the Chinese carving lacquers.

研究分野：美術史

キーワード：漆　彫漆　和物彫漆　偕楽園塗　堆朱楊成　玉楮象谷　紀州徳川家　Carving Lacquer

１．研究開始当初の背景

彫漆とは、器物の表面に漆を何回も塗り重ねて厚い層を作り、その漆層に文様を彫り表す漆芸技法である。彫漆は中国・南宋時代にその技術が確立し、元・明・清時代を経て現代まで作り続けられている。我が国には、鎌倉時代に舶載され、続く室町時代に武家を中心に生活空間を唐物で飾ることが定着すると、彫漆は室礼に不可欠な調度品となった。

このような背景から、従来の漆工史おける彫漆研究は、「唐物」（中国製）を中心に行われきた。特に近年では、中国における遺跡調査の成果を反映し、伝世品を出土遺物と比較検討することで、宋時代や元時代の彫漆の特質が明らかにされるなど、研究の進展が著しい分野でもある（①②③）。

我が国においては、従来、手間のかかる彫漆よりも、木地に直接文様を彫り込み、その上に朱や黒の漆を塗った彫木彩漆、いわゆる鎌倉彫が主流となったため、彫漆の技術が根付くことはなかったと考えられてきた（④）。しかしながら、数量の限られた舶載品だけで国内の需要を賄えたとは考えにくく、日本における彫漆の制作も試みられたと考えるほうが自然なのではないか。

本研究の代表者がこの問題の着想に至ったきっかけは、「偕楽園製」（朱文方印）の彫銘を伴う彫漆を発見したことによる（⑤）。偕楽園とは周知の通り、紀州藩 10 代藩主徳川治宝（1771～1852）が、和歌山西郊に造営した別邸・西浜御殿の庭園の名である。これまで偕楽園の名前は、数奇の殿様と称された徳川治宝が、自らの趣味趣向と殖産興業のために制作した陶磁器「偕楽園焼」で知られている。ところが、偕楽園の名を冠した漆器については、『南紀徳川史』などにも記述がなく、これまで全くその存在が知られていなかった。

しかし本研究の代表者は、現在までに「偕楽園製」の彫銘や箱書を伴う堆黒や堆朱の硯箱・軸盆・重箱・食籠など 10 件を確認した。江戸時代後期の事例ではあるが、偕楽園塗の彫りの断面などを観察すると、中国製の彫漆に比べて、柔らかな質感を有しており、漆の調合方法や製法そのものが唐物とは異なる可能性があると考えられる。偕楽園塗の漆調合などの材料、彫技などの技法の詳細や文様を精査することで、和物彫漆の特質の一例を把握することができるだろう。これにより、現在、唐物として各所に収蔵されている和物彫漆を求索するための手がかりを得ることができると考える。

また、室町時代から近代に至るまで代々彫漆の技法を継承したとされる「堆朱楊成」の家系が知られている。八代堆朱楊成が三代将軍徳川家光に召し出されて以降は、将軍家の御用を勤めていることを鑑みても、江戸初期から日本製の彫漆が存在した可能性は極めて高い。ところが、この堆朱楊成の彫漆に関する調査や考究はこれまで全く行われておらず、製法や材料が唐物と同様であるのか、あるいは異なるものであるのか、また製品の用途などの実態について、未だ不明瞭なままとなっている。「松竹梅堆朱盆」（18 世紀、東京国立博物館蔵）などの堆朱楊成の彫漆の材料・技法などの製法を精査して、和物彫漆の比較検討材料としたい。

また和物彫漆の中にあって、唯一研究の蓄積を有しているのが玉楮象谷（1806～1869）である。玉楮象谷は、遊学先の京都で社寺所有の唐物漆器に接したことがきっかけで、彫漆・存清・蒟醤の技法を独学で研究、試行錯誤の末に日本的に転成させた漆器を編み出した。天保元年（1830）、高松藩主松平頼恕（1798～1842）に制作を命ぜられて以降、松平家に仕え、象谷の漆器は藩を代表する漆芸品として将軍や大名への進物にも利用された。象谷については、作品収集と文字資料の検討が地元の高松を中心に行われてきた（⑥⑦）。しかし、象谷の彫漆の材料・技法などの製法に関する詳細な調査・研究は未だなされておらず、今後は材料・技法の解明等、より実作品に肉迫した考究を行う必要がある。

２．研究の目的

本研究は、これまで「唐物」（中国製）を中心に行われてきた彫漆研究を根本から見直し、長く研究の埒外に置かれてきた「和物」（日本製）彫漆の実態を解明しようとするものである。

とくに本研究では、作品や資料が充実している江戸時代の「和物」彫漆、すなわち江戸幕府御抱職人の堆朱楊成、高松松平家御抱職人の玉楮象谷、紀州徳川家の御庭塗＝偕楽園塗などの彫漆ついて悉皆調査を行い、漆調合などの材料、彫技などの技法や文様等の特徴を把握し、唐物との相違点を明らかにすることを目的する。これによって、数多の唐物彫漆のなかに埋もれている和物彫漆を、求索するための有用な手がかりが得られると考える。さらに、江戸後期に加熱する諸藩の殖産興業が陶磁器だけでなく、彫漆制作にも及んでいた可能性についても解明することも目標とした。

３．研究の方法

当該研究期間に、全国の所蔵機関へ出向き、偕楽園塗、および玉楮象谷、堆朱楊成の彫漆の実地調査を実施し、作品データの蓄積とその分析を行った。調査に先駆けて、まず全国の美術館・博物館を対象に所在調査アンケートを実施して、作品の所蔵機関を把握した。当該研究期間内に、東京都・東京国立博物館、東京都・静嘉堂文庫美術館、香川県・香川県

立ミュージアム、京都府・清水三年坂美術館、個人所蔵家（東京都、京都府、大阪府、和歌山県、福岡県等）のほか、米国・サンフランシスコ・アジア美術館における調査を実施した。なお、作品の保存状態、所蔵機関の展示計画等の理由により、調査が叶わなかった作品もあった。

調査では、それぞれの作品を目視およびマイクロスコープで観察し、彫技、漆の調合法や漆層の特徴などを文字情報として記録した。また採寸を行い、作品の全体写真、展開写真、各面の写真、部分拡大図、顕微鏡写真をデジタルカメラで撮影した。それらの情報をデータベース化した。こうして収集したデータをもとに、「和物」彫漆の材料・技法・文様などの特徴を考察した。

同時に各大名家の蔵帳や売り立て目録などを精査し、和物彫漆を制作する際に手本とした唐物彫漆があったか否かについても検討した。なお本歌が確認された場合は、その材料・技法・文様を調査し、和物彫漆のそれと比較検討をおこなった。

並行して、紀州徳川家、高松松平家、および幕府関係の文献資料を中心に、偕楽園塗や玉楮象谷、堆朱楊成の彫漆の製法や受容等に関する記録をできる限り探した。

４．研究成果

偕楽園塗および類品の調査を行った結果を以下に記す。まず、塗り重ねの層はより簡易に厚みを作るため、漆に別材料を混ぜたパテ状のものを数回から十数回ほど塗り重ね、最終の数層のみに黒漆あるいは朱漆を塗る簡略な技法がとられていた。この技法は、中国・明時代の漆工技法書『髹飾録』に掲載される「堆紅」に類似したものであることを確認した。これにより、本稿では便宜的に堆朱・堆黒を使用した作品名称についても、『髹飾録』に記された堆紅・仮彫紅などを含めて、実際の技法に則った名称を付与すべきであると考える。この点については、研究者、技術者の皆様から広くご意見を募り、慎重な検討を行ったうえで決めていきたい。なお、漆に混ぜられた材料については、今後科学分析などをおこなって解明したい。

素地構造の特徴として、食籠や合子など円形の蓋物が、芯持ち材の挽物製であることを確認した。文様は、屈輪文を彫り表したものが最も多く、花鳥文のものもみられる。屈輪文には、眼鏡形・唐草形に加え、如意頭形やハート形、唐草形など数種の屈輪文を組み合わせたものがある。それらは唐物彫漆の屈輪文の敷き写しではなく、独自にアレンジが加えられている点も興味深い。また花鳥文には、更紗などの染織品の模様から図様借用したとおぼしきものもみられる。

製作地は、和歌山西郊に徳川治宝が造営した別邸西浜御殿の庭園、偕楽園であろう。また伝来の状況から、偕楽園塗が藩内で使用されるだけでなく、贈答品や下賜品としても活用されていたことが確認できる。

しかしながら、いずれも未だ検討の途上にあるため、さらに広く作品や資料を博捜し、その実態を明らかにしていきたい。

また、今後は偕楽園塗を主導した徳川治宝の製作意図なども考察する必要がある。蒔絵や螺鈿など数ある漆工芸の中から、彫漆を選択したのはなぜか。研究代表者は、偕楽園塗が治宝の中国趣味の一表象であったと考えている。偕楽園焼を始めとする紀州御庭焼には、楽焼の茶碗や香合などのほかに、天保 8 年（1837）に三井高祐が治宝から拝領した「交趾写寿字文筒花入」（三井記念美術館蔵）のような、中国陶磁の意匠や技法を模倣したものが散見され、治宝の強い中国趣味が伺われる。治宝の中国趣味の様相については、所持していた美術品や、文字資料などから多角的な検証をおこなった上で解明していきたい。

また偕楽園塗とほぼ同時期に、彫漆を制作した玉楮象谷の作品調査を実施した結果、以下の知見が得られた。なお、象谷作品については、象谷が仕官した高松藩松平家に伝来した、いわゆる基準作を中心に調査を行った（なお作品の保存状態、所蔵機関の展示計画等の理由により、一部調査が叶わなかった作品もあった）。

象谷の彫漆における漆の塗り重ね層は、唐物彫漆と同様に、同じ質の漆を何回も塗り重ねて厚い層を作り、その漆層に文様を彫り表す本格的な手法で制作されていることが確認できた。しかし、漆の塗り重ねは単純なものではなく、たとえば堆黒の場合であっても、黒・黄・茶・朱など複数の色漆を塗り重ねる、独特の手法であることがわかった。文様を彫り表わす彫技は非常に鋭く、象谷が優れた技術を有していることが確認された。

文様については、唐物彫漆を写すだけでなく、菊や牡丹などの植物に蜻蛉や蝶を組み合わせたり、紅葉・忘貝・能楽などをモチーフに使用するなど、いわば和様化した個性的なものであることが明らかとなった。

素地構造の特徴として、食籠や合子など円形の蓋物が、芯持ち材の挽物製であることを指摘した。

なお本研究において、想定外の結果となってしまったのが、堆朱楊成である。所蔵機関のデータベース等で堆朱楊成作という記載がある作品、また堆朱楊成作の伝承がある作品の調査を実施したところ、楊成の作銘や箱書を伴った作品は 1 点も確認できなかった。つまり、それらは全て、台帳の記録や伝承により堆朱楊成の作品となされたもので、楊成の手によるものという確たる証拠がない状態であった。

その一方で、唐物漆器の調査をしていると、堆朱楊成による極書や折紙、箱書がしばしば見出されることに気付いた。このことから、

小池富雄氏が示唆したように、少なくとも江戸時代の堆朱楊成は、彫漆の制作者というよりも、古筆鑑定における古筆家のような、唐物漆器の鑑定家として活動していた可能性が一層色濃くなったと思われる（⑧）。

従来の漆工史では、彫漆研究は「唐物」（中国製）のみを対象に行われてきた。そして、日本では手間のかかる彫漆よりも、木製の素地に直接文様を彫り込み、その上に朱や黒の漆を塗った彫木彩漆（いわゆる鎌倉彫）が主流となったため、彫漆の技法が根付くことはなかったという説が定着している。

しかしながら、紀州徳川家の偕楽園塗や、玉楮象谷が手がけた彫漆が現存しており、少なくとも江戸時代には、「和物」（日本製）の彫漆が存在していたことは疑いのない事実である。これら偕楽園塗や玉楮象谷の彫漆の技法・材料・文様の特徴を捉えることは、現在、「唐物」として通用している彫漆から、「和物」を探し出す有用な手がかりとなるに違いない。本研究で得られた知見は、時代を遡り鎌倉・室町時代の和物彫漆の様相を明らかにする際にも、必ず役立つものになるだろう。

今後もさらなる考究を続けることで、これまで日本では根付くことがなかったと評された彫漆の技法が、蒔絵や螺鈿と同様に日本で受容され、発展を遂げていたことを明らかにできると考える。

＜引用文献＞

① 『唐物漆器―中国・朝鮮・琉球』（徳川美術館、1996）
② 傅挙有「七千年的光輝歴程―中国古代漆器工芸概論」（『中国漆器精華』、福建美術出版社、2003）
③ 西田宏子「宋・元時代の漆器」（『宋元の美―伝来の漆器を中心に』、根津美術館、2004）
④ 小松大秀・加藤寛『漆芸品の鑑賞基礎知識』（至文堂、1998、P79-89）
⑤ 小林祐子「[資料紹介]紀州徳川家旧蔵「堆黒雲龍文合子」について」（『三井美術文化史論集』第１号、三井記念美術館、2008）
⑥ 『玉楮象谷』（高松市美術館、2004）
⑦ 住谷晃一郎『讃岐漆芸』（河出書房新社、2005）
⑧ 小池富雄「堆朱楊成による唐物漆器の鑑定」（『金鯱叢書』第 26 輯、徳川黎明会、1999）

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

・小林祐子、［資料紹介］紀州徳川家の偕楽園塗について、漆工史、漆工史学会、査読有、第 35 号、2013：pp.37-48

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

６．研究組織

(1)研究代表者

小林　祐子（KOBAYASHI YUKO）
公益財団法人三井文庫・文化史研究室・主任学芸員
研究者番号：60399334

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし